フロイト理論におけるエディプスコンプレックス概念の形成と変遷

網 谷 優 司

はじめに

20 世紀に最も通俗化された学術言語のひとつといってよい「エディプスコンプレックス（Ödipuskomplex）」は精神分析学の創始者ジークムント・フロイト（1856～1939）によって、案出された。

フロイトによると、エディプスコンプレックスは男根期と呼ばれる 3 歳から 6 歳ごろに顕在化する。男根期においては、男児・女児双方にとってペニスが特別な意味を持つ。つまり、この年頃になって子供は、ペニスのある／なしによって、性別をアイデンティティとして認識するようになるのである。フロイトは、エディプスコンプレックスを語る際、主に男児のモデルを採用する。男児にとってのエディプスコンプレックスは、母親と性交したいという願望と、そのために父親を殺したいが、父殺しを企めば父から去勢されてしまうのではないかという不安が心にあふれることである。結局、男児は去勢不安によって母親に対するリビード的欲望を放棄し、性的欲望を禁止して懲罰を与える父親を内面に取り込むことで超自我を形成する。[1] 超自我は、良心や倫理観、道徳観などにもつながってゆくのだが、その機制は本稿 3 章において検討する。

ところで、エディプスコンプレックスについての精神分析学説の展開の中でどうしても言及しなければならない重要性を持ったものとして、メラニー・クライン（1882～1960）の早期超自我仮説がある。クラインは自らの臨床経験から、超自我がエディプスコンプレックスの後継者だとするフロイトに反論した。クラインによると、生後 6 か月くらいの時期に、早くも生の欲動と死の欲動の両極性によって自我が分裂し、そのうちで死の欲動の一部が投影された部分

本稿におけるフロイトからの引用はおもに以下のものから行い、略号「StA」と巻数・頁数を示す。
Freud, Sigmund: *Studienausgabe*. 10 Bde. Hrsg. v. Alexander Mitscherlich, Angela Richards, James Strachy. Frankfurt am Main 1969-1975.

[1] フロイトが女児の場合のエディプスコンプレックスについて論じるのは、『女性の性愛について』（1931）を待たねばならない。女児にとっても最初の愛の対象は母親なのだが、男根期になって、母親と同じく自分にはペニスがないことに気づいた女児は「ペニス羨望（Penisneid）」に陥り、ペニスをくれなかった母親を恨み、それを持つ父親を性的に欲望するようになる。こうしたエディプス状況は「去勢不安」によっては克服されえないので、フロイトにとって女児のセクシュアリティの発達は男児の場合より謎に満ちていた。Vgl. StA 5, S. 273-294.

が、自我の残りの部分と対立して超自我の基礎を形成するのである。[2]

このクラインの学説は、幼児や児童に精神分析を施す可能性を切り開いたものであり、臨床精神分析において、エポックメーキングな理論の「発展」ととらえられている。[3] しかしその一方で、クラインに代表される対象関係論学派は、精神分析を心理療法の一つとして発展させることには成功したが、フロイト自身が実践しているような、精神分析の集団心理学への応用についてあまり関心を示さない。

人間は「法」を象徴化して共有しないと、集団を形成することはできないだろう。「法」の象徴化や共有を可能にするのがほかならぬ超自我なのだが、クラインは超自我の成立とフロイトのいうエディプスコンプレックスの克服を切り分けてしまった。このクラインの所作には、精神分析においてプレエディパルなものへの関心を高め、古典的なエディプスコンプレックスの重要性を低下させてしまった面があると思われる。

しかし、今日まで精神分析が思想史において大きな価値を有しているのは、フロイトがエディプスコンプレックスを応用して集団や文化について論じることの可能性を切り開いたことによっている。[4] したがって、本稿において筆者は今一度、フロイトがもっぱら問題とした男児モデルのエディプスコンプレックスについて検討したい。

本稿は、もともと個人心理学の領域での神経症の病因として見做されているにすぎなかったエディプスコンプレックスが、精神分析が集団論としての射程を獲得するに至るきっかけとして変遷を遂げたことを、ジャック・ラカン（1901～1981）やロジン・ペレルバーグ（1951～ ）の指摘を通して明らかにする。

ところで筆者は、今日においてフロイトのエディプスコンプレックス概念を検討しなおすことは、現代文明論の文脈においても意義深いと考えている。激動のヨーロッパ近代において、18 世紀末のフランス革命では「王」の首が切って落とされ、19 世紀末に刊行された『喜ばしき知恵』において、ニーチェは「神」の死を宣告した。[5] こうした「父親殺し」の延長線上に現代文明は位置づけられる。

では、あらゆる子供の心性に父親殺しの欲望を読み取とったフロイトが、エディプスコンプレックスと名指した概念は、どのように案出され、変遷し、集団心理学や文明論に応用されて

---

[2] メラニー・クライン「精神機能の発達について」(佐野直哉 訳) :『メラニー・クライン著作集５』(小此木圭吾／岩崎徹也 編）誠信書房 1996 年、91~102 頁所収参照。

[3] 富田悠生「エディプス・コンプレックスの発展」: 青山学院大学教育人間科学部『青山学院大学教育人間科学部紀要』7 号 (2016 年)、119~126 頁所収参照。

[4] 大澤真幸は、以下の書籍の中で、マルクスやフロイト、フーコーといった思想家の社会学への貢献を記述し、特にフロイトのエディプスコンプレックスは、後世の社会学説に絶大な影響を与えたと述べている。大澤真幸『社会学史』講談社現代新書 2019 年、193~211 頁参照。

[5] Vgl. Nietzsche, Friedrich: Die fröliche Wissenschaft. In: *Kritische Studienausgabe*. Bd 3. Hrsg. v. Giorgo Colli, Mazzino Montinari. München / Berlin / New York 1980, S. 343-651, hier S. 480f.

いったのだろうか。以下では、その道程をたどってみることにする。とりわけ、フロイトが晩年に取り組んだ『文化の中の居心地悪さ』（1930）や『モーセという男と一神教』（1939）において、エディプスコンプレックスが具体的にどう論じられたのかは、管見のかぎり、ラカンやペレルバーグも含めて、詳述した論者はいない。[6] よって、本稿ではフロイトの文明論や宗教論におけるエディプスコンプレックスの応用が具体的にどうなされたのかを 4 章において確認することとする。

１．エディプスコンプレックスの概念化

1887 年から 1904 年にかけての時期、フロイトは耳鼻科医の友人ヴィルヘルム・フリースとおびただしい数の文通をしていた。そしてその手紙の中でいわゆる「自己分析（Selbstanalyse）」を行うようになる。その分析の主な対象となったのがフロイト自身の父との関係や、それが主題化されている夢の数々であった。そして、そこから生まれてきたのがフロイト理論の主軸として名高いエディプスコンプレックスである。父ヤーコプの死から約一年が経過した 1897 年 10 月 15 日のフリース宛の手紙には、フロイトが初めてエディプスコンプレックスを自身の心の裡に発見し、それが人類にとって普遍的なコンプレックスだという確信に至ったことが見て取れる。

> 普遍的な価値のあるひとつの考えが僕の心に浮かびました。僕は母親への惚れこみと父親への嫉妬を自分の中にも見つけたのです。そして今やそれらが、必ずしもヒステリーに罹患した子供たちの場合ほど早い時期でないにしても、早期幼児期の一般的な出来事だと考えています。（中略）もしそうなら、知性が運命という前提に対して唱えるあらゆる異議にもかかわらず、エディプス王が持っている人の心をとらえる力が理解できます。（中略）聴衆の誰もがかつて萌芽的には、そして空想の中では、そのようなエディプスだったのです。そして、ここで現実に取り込まれた夢の充足を前にして、誰もが、自らの幼児期の状態を今日の状態から隔てているすべての抑圧の力でもって、怖れおののくのです。[7]

フロイトが「エディプスコンプレックス」をタームとして論文中に用いるのは『性愛生活の心理学への寄与』（1910）が初めてだが、1900 年の『夢解釈』において既に、フリース宛書簡

---

[6] ペレルバーグは、『モーセという男と一神教』について、全く触れていないわけではなく、フロイトの「父に関する仕事」の到達点だと述べている。Vgl. Perelberg, Rosine J.: Murdered father; dead father: Revisting the Oedipus complex 1. In: *The International Journal of Psychoanalysis* 90 (2009), S. 713-732, hier S. 720f.

[7] Freud, Sigmund: *Briefe an Wilhelm Fliess*, *1887-1904*. Hrsg. v. Jeffrey Moussaie Masson. Frankfurt am Main 1985, S. 293.

と同じようにソフォクレス悲劇を援用する形で、フロイトはエディプスコンプレックスを概念として提示している。

> わたしの数多くの知見によると、のちに精神神経症になるすべての人々の子供時代の心的生活において、両親は主要な役割を演じている。そして、両親の片方に対する惚れ込みと、もう片方に対する憎しみは、幼年時代に形作られ、のちの神経症の症状形成にとって極めて重要な素材となる心的活動において動かしがたい構成要素である。私は精神神経症患者が、まったく新しいものや自らに特異なものを作ることはできるけれども、正常なほかの人びとと上記のような点で截然と分かたれているとは思わない。（中略）古代にはこうした知見の支えになってくれる伝説が残されている。（中略）私がいっているのはエディプス王の伝説と、ソフォクレスの同名悲劇である。（中略）彼の運命が我々をとらえて離さないのは、我々もまた彼の轍を踏むかも知れず、我々の誕生する前に、あの神託は彼に対するのと同じように我々に呪いをかけているからに他ならない。最初の性的なうごめきを母親に向け、最初の憎しみと暴力的な願望を父親に向けるということは、我々みなに決定されたことだったのかもしれない。（StA 2, S. 265-267）

エディプスコンプレックスが正常な形で克服されなかったとき、人間は神経症に罹患したり、文化生活の中で出所の分からぬ罪責感に苦しめられたりすることになる。以下では、そうしたエディプスコンプレックスがもたらす多様なメカニズムを見ていく。

２．神経症の中核としてのエディプスコンプレックス

自ら精神分析学を創始し、それを中期以降に集団心理学や文化論、宗教論に応用して、二十世紀思想に絶大な影響を与えたフロイトだが、もともと彼は一介の神経科医であった。1886 年、ウィーンで開業すると、『ヒステリー研究』（1895）を共著したヨーゼフ・ブロイアーの斡旋もあり、フロイトは多数の神経症患者の治療に当たることになる。そこで、フロイトは性的な「相容れない表象（eine unerträgliche Vorstellung）」が神経症の背後に潜んでいるという考えを抱くようになった。相容れない表象は意識から無意識下に抑圧される。しかし、無意識下に抑圧されたものは形を変えて、意識に浮上しようとする。神経症症状や夢、失錯行為はそうした「抑圧されたものの回帰（die Wiederkehr des Verdrängten）」である。心理療法としての精神分析は、抑圧されたものの回帰を「解釈（Deutung）」することによってもともとあった相容れない表象を探り当て、それを患者に意識化させることで神経症症状を除去することを旨とした実践である。フロイトはこのような治療実践を積み重ねていく中で、神経症患者においては一般にエディプスコンプレックスが心理的・社会的に適切な形で克服されておらず、エディプスコンプレック

スこそが神経症の核心であることを突き止めた。そのことを彼は、『性理論のための三篇』(1905)に対して 1920 年に追加した注で、以下のように振り返っている。

> エディプスコンプレックスが神経症の中核コンプレックスであり、それが神経症の本質的な内容をあらわしているのは確実だ。その頂点をなしているのが幼児のセクシュアリティで、その余波によって成人のセクシュアリティは決定的な影響を受ける。人間として生まれた者は誰しも、エディプスコンプレックスを克服するという課題を持っている。これに失敗した者が神経症にかかるのである。精神分析研究が進展するにつれて、エディプスコンプレックスの意義がさらに先鋭化されてきた。エディプスコンプレックスを認めるということが、精神分析の支持者を敵対者からわけ隔てる合言葉になった。(StA 5, S. 129)

フロイトには五大症例というものがある。「ドラ」、「ハンス」、「鼠男」、「シュレーバー」、「狼男」の症例である。ここでは、本稿の中心テーマである男児のエディプスコンプレックスがもっともよく表れているという点で、『ある 5 歳児恐怖症の分析』(1909) から症例ハンスについて概観する。

ハンスの分析は、重い恐怖症の発症が引き金となり彼の父親自身によってなされた。親が我が子の記録を取り、分析をすることは当時さほど珍しいことではなかった。少年は家から通りに出ていくことを、馬にかまれたりけり倒されたりすることを恐れて拒み始めたのである。フロイトはこの恐怖症をエディプスコンプレックスから説明する。彼によれば、馬にかまれるというハンスの恐怖は、父親によって去勢されるという無意識的な不安を動物へと置き換えた結果だった。彼は、母親と寝て父親を排除したいという欲望を表明するほど、母親への強い近親相姦的愛着を経験していた。それは幼い少年にとって相容れない表象である。もう一方で、父親に強い愛着を感じると同時に、母親への行く手を遮るライバルとして憎しみを感じた。それもまた少年にとって相容れない表象であった。フロイトの考えでは、ハンスの母親に対する近親相姦的欲望と、愛する父親を憎むというアンビヴァレントな感情の組み合わせが、少年の中に禁じられた欲望に対する去勢の罰を受ける恐怖を引き起こしたのである。

> ハンスは自らの父と母との関係において、私が『夢解釈』や『性理論のための三篇』で両親に対する子供の性的関係について主張したことをすべて、きわめて鋭くわかりやすく証明している。彼はまさに小さなエディプスであり、美しい母を独り占めして、彼女のそばで眠るために、父をわきへ追いやってしまいたいと思っている。(StA 8, S. 96)

このハンスの症例においてフロイトは、幼児性欲の病的な表れと正常な表れには基本的な差異

が存在しないことを証明できた。去勢不安は、恐怖症に罹患した子供にも、正常に発達している子供にもみられる。要するにフロイトはこの幼児神経症を一般化できるモデルと見做している。なぜならそれは、成人の神経症が少年ハンスの恐怖症に発見されたものと同じ幼児コンプレックス、つまりエディプスコンプレックスと密接な関係があることを明らかにしているからだ。

> 我々の幼い恐怖症の患者から離れる前に、治癒へと早期に導いたこの分析治療が私にとって価値あるものにしてくれている推測について述べなければならない。厳密にいうと、私はこの分析から何も新たなものを得ていない。今回のケースでは、大人の患者を扱うときに、もっとぼんやりとした、推測的な方法で明らかになっていなかったものは一つもなかった。そして、ほかの患者の神経症は必ずハンスの恐怖症の裏に隠れていた幼児性のコンプレックスにその原因を持っていた。つまり、神経症の抑圧現象の多様性と、病因的素材の豊饒性は、同じ観念コンプレックスによる極めて少ない過程に起因するようである。私はこの幼児神経症に典型的で範例的な意義を持たせたいと思う。（StA 8, S. 122）

このように臨床医として神経症を治療するフロイトにとって、エディプスコンプレックスは、神経症の中核コンプレックスとして理解されていた。

３．エディプスコンプレックスの普遍化

次に筆者が目を向けるフロイトの著作は『トーテムとタブー』（1913）である。四本の論文がセットになっているこの著作の最後の論文においてフロイトは、以下のような仮説を提唱する。

原始時代、人々は原父を頂点とする部族を築いていた。厳格な原父は、部族の女たちを独占し、兄弟たちを虐げていた。このように性的に抑圧された兄弟たちは、ある日、結託して原父を殺してその死体を食べ、その強さをわがものにした。しかし、それと同時に兄弟たちは、原父殺害について後悔をするようになる。彼らは、原父を憎むと同時に愛してもいたのだ。

> ある日、追い出された兄弟たちは協力し、父を殺して食べ、父が率いる群れに終止符を打った。彼らは協力して一人ではできなかったことを可能にしたのだ。（中略）彼らが死者を食べるということは、この人食い人種には当たり前のことである。きっとこの強力な原父は兄弟たち一人一人から恐れられ、ねたまれたお手本だった。今や彼らは食すという行為において原父と同一化を成し遂げ、彼の強さをわがものにした。おそらく人類最初の祝祭であるトーテム饗宴は、多くのもの、つまり社会組織、道徳的禁制、そして宗教の端緒である記憶すべき犯罪行為の反復と記念式なのだろう。前提を度外視して、この結果を考

えるに値するものにするためには、一緒に殺害行為を行った兄弟たちが父に対する相矛盾する感情を抱いていたことを想定しさえすればよい。それは、我々が子供や神経症患者において示しうる父コンプレックスのアンビヴァレントな内容である。彼らは権力欲や性的欲求を強力に阻害した父を憎んでいたが、彼に愛情を抱き、あこがれてもいたのである。兄弟たちは彼を殺害し、憎しみを満足させ、父との同一化願望を貫徹したあと、強く優しい心の動きに襲われたに違いない。それは後悔という形をとって現われ、後悔が共有されて成立する罪責感である。（StA 9, S. 426f.）

そこで兄弟たちは、父の代理としてトーテム動物を選び出してその殺害を禁止し、女たちを一斉に断念する。ここに父親殺しと近親相姦のタブーが生まれたのである。

死んだ者〔＝父〕は生きていた時よりも強くなる。こうしたことは今日においても人間の運命に見られることである。かつては父の存在によって妨げられていたものを、いまや彼らは、精神分析によって我々によく知られるようになった「事後服従」の心的状況によって自ら禁ずるのである。彼らは父の代理であるトーテムの屠殺を許されざることとして、自らの行為が再びなされないようにし、自由になった女たちをあきらめることによって、果実を断念する。こうして彼らは「息子の罪責感」からトーテミズムの二つの基本的なタブーを創る。だからこそこれらのタブーは、エディプスコンプレックスの抑圧された二つの願望と一致するに違いない。（StA 9, S. 427）

この時期のフロイトは、「個体発生は系統発生を繰りかえす」[8] という着想を多くの著作の中で訴えていた。フロイトは「幼年期から成人に至る個人の発達の過程（個体発生）」と、「人類がその起源から今日に至るまでの進化の過程（系統発生）」を重なり合うものとして考えていた。つまり、フロイトによると人類の歴史において起こったトラウマ的な出来事の痕跡は、個々人の生活史においても再び現れ、そのパーソナリティの構造化に寄与する。系統発生の初期における「原父殺害」のトラウマは、父親殺しと近親相姦のタブーという形で、個体発生の初期に刻み付けられるのである。

３．１ ラカンの指摘

さて、フロイトの初めての集団心理学論『トーテムとタブー』におけるエディプスコンプレ

[8] これはダーウィンの進化論の後を受けて生まれた「反復論」と呼ばれる仮説である。上山安敏『フロイトとユング ― 精神分析運動とヨーロッパ知識社会』岩波現代文庫 2014 年、117 頁参照。

ックスの記述について、フランス現代思想に大きな影響を与えた精神分析家であるラカンは興味深い指摘をしている。彼によるとこの著作を境にフロイトのエディプスコンプレックス概念に変化が生じたというのである。では、具体的にラカンは『トーテムとタブー』におけるエディプスコンプレックスについての記述のどこに注目したのか、確認しよう。

> 彼らは自分たちが兄弟であることに気づき、誰も分離されることを望むまいと思うでしょう。（中略）彼らはみんなで一致団結して、誰も愛しい母親には接触をするまいと決意します。（中略）このように『トーテムとタブー』が今や、ソフォクレスの出典と関係がなくなってしまっているのですが、いままで誰もこの奇妙さに驚いてはいないようです。[9]

ラカンは『トーテムとタブー』において、エディプスコンプレックスがソフォクレスの出典と関係がなくなっていると指摘している。これは、『夢解釈』において、ソフォクレス悲劇を援用する形で概念化されたエディプスコンプレックスは、すべての幼児が心の内で父親を殺し、母親をめとりたいという願望を抱いているというものだったが、『トーテムとタブー』では、父親殺しのあとに、近親相姦の断念という従来の筋書きとは逆の展開が記されていることを指している。

ラカンの卓見によって気づかれたこの齟齬は、いったいどこに起因しているのか。ラカン派分析家の立木康介は、原父殺害の後に息子たちの心に湧き起った「罪責感」に注目する。なるほど、『夢解釈』において援用されたソフォクレスのオイディプス劇において、真理を知らされた主人公は自らを呪い、自らの眼球を抉り出す凄惨な場面が描かれている。しかし、ここで主人公を支配している強烈な感情は、明らかに罪責感に還元しうるような単純なものではない。つまり、『夢解釈』におけるエディプス神話と、『トーテムとタブー』における原父殺しの神話の間で、エディプスコンプレックスは、「欲動の物語から罪責感の物語へ」アクセントをシフトさせているのである。このことは、フロイトの晩年の仕事において、例えば『文化の中の居心地悪さ』で「罪責感」がフロイト理論の主役に躍り出ていることや、最晩年の著作『モーセという男と一神教』では、ユダヤ民族がエジプト人モーセを殺害したことに起因する「罪責感」を、宗教的な慧眼の持ち主パウロが「原罪」と名指して、キリスト教を生み出したという論となって現れる。

まとめると、父への憎しみと母への愛から始まったエディプスコンプレックスの概念は、『トーテムとタブー』に至って、父への憎しみとその罪責感に収斂しているのである。「父への憎しみ」の対になるものが「母への愛」から「父への罪責感」へと完全に入れ替わってしまったの

---

[9] Lacan, Jacques: *The other side of psychoanalysis*. transl. Russell Grigg. New York 2007, S. 115.

だ。そして、この「父への罪責感」は、晩年のフロイトの著作『文化の中の居心地悪さ』や、『モーセという男と一神教』の中心となって現れる。[10] このことは、本稿 5 章において具体的に確認する。

３．２ ペレルバーグの指摘

しかし、ここでは先を急がずに、原父殺害の後に起こる「法の象徴化」が人間に集団を築くことを可能にした点に着目したい。法の象徴化機能は、『ナルシシズムの導入に向けて』（1914）における「自我理想（Ichideal）」及び、『自我とエス』（1923）における「超自我（Über-Ich）」の概念化を触発した。

人間が集団を築くようになるには、共同体の成員の中で「法」が共有されることが必要不可欠であろう。フロイトが初めて本格的に集団を論じたのが『トーテムとタブー』においてであり、この著作の中にフロイト理論において人間が法を象徴化できるようになった端緒を見出すことができると指摘したのは、英国精神分析協会・現会長のペレルバーグである。

『ナルシシズムの導入に向けて』においてフロイトは、「自我理想」という心的審級を概念化した。自我理想とは、人が幼児期にナルシシズム的な完全性を夢見ている段階で主体を支配する形式であるとされている。『ナルシシズムの導入に向けて』からフィードバックして『トーテムとタブー』を読むと、生ける原父は「お手本」と表現されていることからもわかるように、自我理想の機能を備えている。しかし、こうした「生ける父」に基づく自我理想はナルシシズム的であるために「禁止」という高次な機能を備えた「法」として作動しない。フロイトが法を象徴化する機能を人間の心に発見するのは『自我とエス』を待たねばならない。この著作の中でフロイトは「第二局所論」を唱え、人間の心は、欲動の貯蔵庫としての「エス」、道徳や法を担う「超自我」、そして外界・エス・超自我の三者に仕えてバランスをとる「自我」に三分されると定式化した。筆者がここで注目したいのはもちろん超自我についてである。超自我についてフロイトは『精神分析入門講義・続』（1933）の中で以下のように復習している。

> 我々は超自我に、自己観察、良心そして理想形性の役割を割り当てました。超自我の成立についての説明から、それは極めて生物学的に重要で宿命的な心理学的事実、つまり、長きにわたる両親への依存とエディプスコンプレックスという互いに関連しあった二つのことを前提にしているというのが明らかになりました。超自我は我々にとって、あらゆる道徳的制約の代理、完全性への努力の代弁者、つまり端的にいえば、我々にとっての人間

[10] 立木康介「精神分析と父」：京都大学人文科学研究所『人文學報』101 号（2011 年）、103~112 頁所収、107 頁以下参照。

生活におけるいわゆる心理学的高みから理解されるのです。（StA 1, S. 504f.）

『自我とエス』からフィードバックして『トーテムとタブー』について検討すると、兄弟たちの集団が殺害した原父は、兄弟たちに体内化されて社会組織、道徳的禁制、そして宗教の端緒として機能するようになる。これが、『自我とエス』において概念化された超自我を先取りしているのは明らかだろう。

まとめると、生ける父は自我理想として機能するがそれはナルシシズム的で法の役割を果たさないので、母への近親相姦的欲望に歯止めがかからない。そこで、フロイトは『トーテムとタブー』において原父殺害神話を創出し、父は殺されることで超自我という法の機能を担うことになる。[11] このように、「生ける原父＝自我理想」、「殺害された原父＝超自我」という構図を『トーテムとタブー』から抽出したことがペレルバーグの功績である。[12]『トーテムとタブー』以降、フロイトは次々に精神分析を集団論に応用していく。これは精神分析学の創始者フロイトにとっては、自らの理論の発展といえる。こうした飛躍を可能ならしめたのは、『トーテムとタブー』で原父が殺害されて超自我としての機能を担うことができるようになったからである。我々の文化の基礎には、原始時代の兄弟たちによって殺害されたいわば「不在の存在としての父」が潜んでいるということができるだろう。

４．フロイトの集団心理学におけるエディプスコンプレックス

前章では『トーテムとタブー』で原父殺害神話を創出することで、フロイトはエディプスコンプレックス概念を変遷させ、のちに自我理想、ないし超自我と名付けられる法を担う審級を突き止めたことをラカン及びペレルバーグの指摘を通して確認した。では、『トーテムとタブー』以後にフロイトが発表した『文化の中の居心地悪さ』や『モーセという男と一神教』において、エディプスコンプレックスはいかなる位置を占めているのか。ラカンやペレルバーグの論述は、『トーテムとタブー』の重要性を指摘するにとどまっており、この点に彼らは紙幅を割いていない。よって本章では上記 2 著作を、エディプスコンプレックスの論じられ方に注目して概観していく。

ところで、そもそも神経症の治療方法の一つとして生み出された精神分析が集団やそれに伴う宗教・文化を論じるために使われることについて飛躍を感じる人は少なからずいると思われる。しかし、フロイトにとって、個人心理学と集団心理学に格段の区別を設けることは不必要

---

[11] 「自我理想」と「超自我」とのより詳細な概念的差異については、松山あゆみ「自我理想の起源：フロイトにおけるメランコリーと同一化の問題」：京都大学人間・環境学研究科現代文明論講座『文明構造論集』7 号（2011 年）、45~62 頁所収を参照。
[12] Vgl. Perelberg, S. 720.

であると感じられていた。

> 一見すると我々にとって極めて重要に見えるかもしれない個人心理学と、社会・集団心理学の対立は、立ち入って吟味するとその鋭さの多くは失われてゆく。たしかに個人心理学は個々の人間を扱い、それぞれがどのような方法で欲動の動きの満足に至ろうとするかを探求するが、その際、個々がほかの個人との間に有している関係を無視してよいというのは、極めてまれなある例外状態においてだけである。個々人の精神生活において他人は、お手本、対象、援助者、そして敵対者となるのが通例である。つまり個人心理学は初めから拡大された、しかし正しい意味での社会心理学なのである。（StA 9, S.65）

フロイトの集団心理学論考を執筆順に見ていくと、フロイトの考察対象となる集団が文化的に高度になっていくのがわかる。例えば、『集団心理学と自我分析』（1921）では、集団がいかにして形成されるかが問題になっているのに対し、9 年後の『文化の中の居心地悪さ』では、高度に文化が発展しすぎて、文化が個人を強い「罪責感」で神経症的な状況に追いやってしまうとまで言われている。フロイトにとって「父」とは文化の端緒としてのポジティブな面だけでなく、強くなった超自我として個人を締め付けるネガティブな面のあるアンヴァバレントな存在なのだ。

また、最晩年の著作『モーセという男と一神教』においてフロイトは、ヘブライ人がエジプト人モーセを殺害したという歴史学が得た知見に対して、原始群族による父の殺害に似た価値を与えることで、ユダヤ人としての自らの宗教との対峙の総決算をした。ここでも、モーセという父的存在を殺害したユダヤ人たちが抱く「罪責感」が主題化されている。

４．１ 『文化の中の居心地悪さ』について

『集団心理学と自我分析』の中で集団形成のメカニズムを精神分析的に論じたフロイトは、『文化の中の居心地悪さ』において、集団が文化を獲得していく中で、具体的には何が文化的と呼ばれるのかについて探り、高度に発展した文化がいかに個人の欲動を制限しているかを論じた。

従来、フロイトは文化というものを、自然の威力から人間を守るものがどれだけ高度に手配されているかという有益性の観点からのみ考えていたが、人間が文化に求めるものはどうやらそうしたものだけではないようだとの指摘がこの著作においてなされる。たとえば、都市には遊び場や空閑地として公園が必要であるが、こうした公園に花壇があり、住宅の窓辺が鉢植えで飾られていたりすると文化的に思えるものだ。文化に対する要求はこれだけではなく、清潔さや秩序正しさも必要だとされる。そしてこうした文化の特性の内でフロイトが最後に挙げる

のが正義である。

> 最後に重要な文化の特性として我々が尊重しなければならないものは、どのような方法で人間相互の関係つまり社会的関係が、隣人、援助者、性的な対象、家族や国家の構成員として規定されているかということである。（中略）人間が共同で生活することは、多数者がまとまり、それがどの個人よりも強くなり、しかもどの個人に対しても団結して、初めて可能になる。「むき出しの暴力」と非難される個人の力に対して共同体の力は「法」として対立するのである。（中略）つまり喫緊の文化的な要求は正義である。正義とは、一度確立された法の秩序が、個人の利益のために二度と脅かされないことを保証することである。（中略）文化が発展すると個人の自由は制限を受け、正義はすべての者にその制限を課すのである。（StA 9, S. 225f.）

しかし、人間はあくまで個人としての自由を求め続けるものだとフロイトは指摘する。そして人類の争いの多くはこの個人的な要求と文化的な集団の要求、つまり「法」との対立によって生まれる。フロイトによると、個人的な要求とは、性欲動と破壊欲動の満足である。しかし、「文化は性的な活動から多量の心的エネルギーを取り去り、文化活動において消費させねばならない」[13]。さらに、「文化は性だけではなく、人間の攻撃傾向にも大きな犠牲を要求するとなれば、人間にとって文化の中で幸福を感じるのが難しくなるのもよくわかる」[14]。このように文化は人間個人の性欲動と攻撃欲動の充足を困難なものにする。

性欲動に制限が加えられると人間が神経症的になるというのは、精神分析学の誕生以来の知見だったので新たにここで検討しなおす必要はないだろう。よって、この著作で導入された新しい観点として注目すべきは、人間が文化の要求によって攻撃欲動を制限するとどうなるかということである。フロイトの考えはいとも簡単なもので、外部に向けられ損なった攻撃欲動（死の欲動）はそれが元あった場所、つまり自我に返ってくる。こうして自我に向けられた攻撃欲動は超自我に取り込まれて自我の他の部分と対立するのである。超自我と自我の葛藤は罪責感として感知される。ここでの罪責感は、『トーテムとタブー』における原父殺害神話と密接に関係している。事実、フロイトはこの著作のなかで、『トーテムとタブー』の足跡をたどり直す。

> 私たちは人間の罪責感はエディプスコンプレックスから生じ、兄弟同盟によって父が殺害されたことを通して獲得されたものだという仮説を捨てることができない。（中略）しかし、人間の罪責感を原父殺害に求めるとすると、これは「後悔」の事例だ。そのとき、行

[13] StA 9, S. 233.
[14] Ebd., S. 243.

為の前に良心や罪責感の前提を見つけられるだろうか。この場合、後悔はどこから来たのか。（中略）この後悔は父に対する原初的な感情のアンビヴァレンツの結果だ。息子たちは父を憎むと同時に愛してもいたのだ。攻撃によってこの憎しみが満足されると、行為に対する後悔の中に愛が出現し、父との同一化によって超自我が確立される。（StA 9, S. 257f.）

文化が社会の凝集性を維持するために個人の性欲動と攻撃欲動を制限するという事実はこの論文の核となっている。もし個々人が自分の欲動充足のために反乱を起こせば文化は破滅する。だが、ここがフロイトのいいたいことだが、外的現実において個人と文化の間に目撃される葛藤は、各個人の心的構造の中に存在する葛藤にその対応物を有している。それは、以前の外的権威（原父）と同じように、厳しい超自我の要求と、個人の利益を代表する自我の間の葛藤である。フロイトにとって、この無意識の葛藤から生じる無意識の罪責感が「文化の中の居心地悪さ」の原因である。総じていえば、我々が文化の中で感じる居心地悪さの背後にはエディプスコンプレックスに基づく超自我と自我の葛藤があるのだ。

４．２ 『モーセという男と一神教』について

モーセはフロイト思想を解くうえで決して無視できないキーワードである。モーセは理想の父であり、それだけにフロイトのエディプスコンプレックスの対象になり、ひいてはユダヤ教とキリスト教という二大宗教を分ける岐路に立つ存在であった。[15]

『モーセという男と一神教』で展開される宗教論は三つの部分に分割することができる。まず（１）トーテミズムとして宗教的な現象が出現してから多神教が登場するまでの最初の時期。次に、（２）ユダヤ教において一神教が登場し、これを引き継いだキリスト教が登場した時期。最後に、（３）中世から現代にかけてユダヤ人の迫害が続き、反ユダヤ主義が猛威を振るった時期である。

『モーセという男と一神教』でもフロイトはまずは『トーテムとタブー』の論を想起して見せる。

伝承なるものの本来の姿はどこに存するのか、伝承なるものの特定の力はどこに基づいているのか、世界史に対する個々の偉大な男たちの個性的な影響力を否定することがいかに不可能であるか、物質的欲求からの動機だけが承認された場合、人間の生活の大いなる多様性に対していかなる犯罪的所業がなされる結果になるか、多くの、とりわけ宗教的な理

[15] 小此木圭吾『フロイト思想のキーワード』講談社現代新書 2002 年、234~244 頁参照。

念は、いかなる源泉から人間や諸民族の心を征服するような力をくみ取るのであるか ― これらすべての問題をユダヤの歴史という特殊事例に即して研究するのは魅力的な課題であろう。私の仕事をこのような方向に進めていくならば、私が 25 年前に書いた『トーテムとタブー』の中で論述した内実につながるのかもしれない。（StA 9, S. 501f.）

フロイトは実際、『トーテムとタブー』の論を振り返りながら、トーテミズムとして宗教的な現象が出現して多神教が登場するまでを簡単に跡付ける。フロイトによると兄弟同盟による原父殺害後、父の代理としてトーテム動物が選ばれ、その神聖なトーテム動物に対する殺害が禁止される。その次の段階に至って、動物に代わって人間の顔をした神が誕生することになる。フロイトは父親を殺害した後に力を握るのは女性だと考え、ここに母権制の社会が生まれると主張している。そのため強力な母性神の時代が訪れると想定する。その後、家父長制の時代が訪れるとともに神々は男性となるが、この段階ではまだ諸神が併存している。

男性の神々は、最初は偉大な母親の傍らに控える息子たちとして登場し、のちになってからやっと、父親としての姿を明確に示すようになるのである。多神教のこれらの男性の神々は、家父長時代の影響を映し出したものである。多数の男性の神々が存在し、互いにほかの神々に制約を加え合いながら、ときには上位にある優位の神に服従するのである。ところで次の一歩を進めると、私が取り上げてきた主題、すなわち一人で、唯一で、絶対的に支配する父となる神が再来するのである。（StA 9, S. 532）

この著作の題目にもあるユダヤ民族において誕生した一神教についての問題だが、フロイトはモーセという男を紀元前 14 世紀ごろに生きたファラオであるイクナートンの時代のエジプト人と断定し、その時代においてのみエジプトで栄えた一神教であるアートン教の理念をユダヤの民に授けたとしている。そして、ユダヤの民はモーセを殺害したあと、残酷な神ヤハウェとモーセの記憶を統合する形で独自の一神教を創始したのだ。

聖書の記述が放置してしまった、あるいは聖書の記述が作り出してしまったこの暗闇の中から、今日の歴史研究は二つの事実を取り出すことができた。一つは、E・ゼリンによって見出されたものだが、聖書そのものがはっきりと記述しているように立法者として指導者たるモーセに対して頑迷で反抗的であったユダヤ人たちが、ある日謀反を起こしてモーセを打ち殺し、まさしくかつてエジプト人がしたように、強制的に与えられたアートン教を捨て去ってしまったという事実である。もう一つは、Ed・マイヤーによって示されたもので、エジプトから帰還してきたユダヤ人たちが後年になってパレスチナとシナイ半島

とアラビアの間にある地域で別の近縁の諸部族と合流し、豊かな水に恵まれたカデシュの地で、アラビアのミディアン人の影響のもと、新たな宗教、火の神ヤハウェ崇拝を受け入れたことである。（StA 9, S.509f.）

ユダヤの民はその歴史の幼年期において、父なるモーセを殺害するという暴挙に出た。しかし偉大な指導者を殺害したことは、抑圧されて正式な記録には残されず伝承としてかすかに生き延びる。そしてユダヤの民は近隣のオリエントの神の一人であるヤハウェを信仰するようになる。これは好戦的で野蛮な神であったが、ある潜伏期間を経てモーセの唯一神の理念が復活する。このメカニズムは『トーテムとタブー』で見られた「事後服従」である。つまり『トーテムとタブー』では原父は殺害されることによってより強大な力を息子たちの心に対して持つようになったのだが、『モーセという男と一神教』では、ユダヤの民がモーセを殺害した後、父なるモーセがさらに強大になり、彼らはモーセに事後服従するのである。

モーセにまつわる伝承は生き残り、伝承の力が、幾世紀もの時の経過の中でゆっくりとではあっただろうが、ついにモーセ自身がやり残した仕事を達成してしまったのだ。ヤハウェは神の場を占拠したが、その神の影がヤハウェ自身よりも強くなってしまったのである。この展開の終幕に至って、ヤハウェ神の背後に忘却されたはずのモーセの神が現れてきた。ヤハウェとは別のこの神の理念のみが、イスラエルの民にあらゆる痛撃を耐えさせ、この民に我々の時代まで生き抜く力を与えてくれたことを疑うものなど一人もいない。（StA 9, S. 499f.）

フロイトはユダヤ教から一神教の理念を引き継いだキリスト教の誕生において一つのトリックを仕掛けている。それは、パウロの原罪の考えに関するものである。パウロは、キリストがアダムの犯した原罪をあがなうために磔刑に処されたとしている。しかし実際、磔刑でもってあがなわれなければいけない罪とは、エディプスコンプレックスに基づいて父なる神を殺害したことに他ならず、キリストは父親殺しの主犯であるとまでフロイトは主張する。フロイトはこのような極端な論理展開によって、ユダヤ教とキリスト教の興味深い示唆を手にした。フロイトは父の宗教だったユダヤ教と息子の宗教となったキリスト教の地位的な違いについて洞察する。フロイトはキリスト教徒の自我は、ユダヤ人が認めまいとしている神（父）へのエディプスコンプレックスによる「罪責感」を自覚し、清めようとしている点で、ユダヤ教より一段階倫理的に進歩したと考えているようである。[16]

[16] 小此木、327~328 頁参照。

〔キリストの磔刑は〕表向きは、父なる神との和解のために行われたとされているが、実際には父なる神を王座から追放し、亡き者にすることであった。ユダヤ教は父の宗教だったが、キリスト教は息子の宗教になった。古い父なる神はキリストの背後に退き、息子であるキリストが父の位置に着いた。これはかの太古の時代に、すべての息子が望んでいたことである。（StA 9, S. 535f.）

『ある錯覚の未来』（1927）を読むと、フロイトは理性信奉者で、宗教は人類が父とのエディプス的関係を克服しそこなったために生まれた荒唐無稽なものであると考え、理性の力でもって将来的に信仰されなくなっていくことを望んでいることがわかる。このフロイトの態度は、あらゆる宗教に向けられているもので、ユダヤ教とて例外ではない。しかし、『モーセという男と一神教』の最後で、フロイトはキリスト教に対するユダヤ教の優位を主張する。

この新しい宗教〔＝キリスト教〕は多くの点で、古いユダヤ教に比べてみると文化的な退行という意味を持っていた。こうした退行は、水準の低い大衆が大勢で参加したり、参加を許されたりする場合にはよく見られることである。キリスト教はユダヤ教が到達していた精神的な高みを維持することができなかった。（StA 9, S. 536）

一つの宗教を信仰しているということと、その宗教から影響を受けているということはおのずと水準の異なる問題である。フロイトは当然ユダヤ教を信仰してはいなかったが、一方で自らがユダヤ人であるということに誇りを抱いていたことはこの引用からも垣間見られる。自らの民族に対するフロイトのアイデンティティはアンビヴァレントな複雑さをはらんでいる。

５．まとめと展望

さて、本稿ではフロイトのエディプスコンプレックス論が、彼自身の学説において、まずは神経症の病因の中核から始まり、『トーテムとタブー』で人間が集団生活を送るために不可欠な要素としての「法」の象徴化機能を説明するものにまで拡大されたことを確認した。その際に、エディプスコンプレックス概念は、「母への愛」から「父親殺しの罪責感」へとそのアクセントを移行させる。そしてこの父親殺しの罪責感は、『文化の中の居心地悪さ』や『モーセという男と一神教』において前景化される。フロイトの学説を初期から晩年まで追跡していくと、エディプスコンプレックス概念が一貫してフロイト理論の中軸を担っていながらも、その概念において、アクセントの置かれる位置が変遷していることがわかるのである。

ところで「はじめに」でも述べたが、エディプスコンプレックスの持つ射程はフロイト理論を越えて、現代文明論にも通じていると筆者は考える。ヨーロッパを中心に起こった激動の近

代化を「父親殺害の反復」としてとらえる見方もある。なぜなら、そこでは神や王といった父的存在の凋落が見られるからだ。[17] 事実としてフロイト以降、こうした観点に立って精神分析の手法を用いて社会を分析した論者が相次いだ。[18]

フロイトが、精神分析学説の中心にエディプスコンプレックスの概念を据えたからこそ、精神分析の手法を用いた社会分析の可能性が開かれるのである。メラニー・クラインのようにプレエディパルなものに重点を置いて独自の精神分析学派を形成した論者もいることは確かだが、少なくともフロイトにおいては、エディプスコンプレックスが発見され、この感情コンプレックスを克服することによって超自我が形成されるという理論展開が最も重要であった。超自我は「父親殺しの罪責感」に基づいており、人間が高度な文化を形成するよすがとなる。今日、フロイトのエディプスコンプレックスを読み直すことは、今一度、社会思想史の一環としての精神分析学の価値を推し量る作業の端緒となるに違いない。

---

[17] 柴田明彦『父親殺害 ― フロイトと原罪の系譜』批評社 2012 年、110~123 頁参照。
[18] こうした学問的潮流は、ライヒやローハイム、マルクーゼが代表的だが、左派思想と親近性があるようだ。 ポール・A・ロビンソン『フロイト左派』（平田武靖 訳）せりか書房 1972 年参照。

Bildung und Wandel des Ödipuskomplexes in der Theorie Sigmund Freuds

AMITANI Yuji

„Der Ödipuskomplex“ ist ein für Sigmund Freud sehr wichtiger Begriff, denn er sah ihn als einen allgemeinen Komplex der Menschheit. Dieser Aufsatz gibt einen Überblick über die Entdeckung des Ödipuskomplexes und seinen Wandel von einem zentralen Komplex der Neurose bis zum Beginn von Freuds Theorie der Zivilisation und der Religion.

Freud stellte in *Totem und Tabu* (1913) die These vom „Mythos des Mordes am Urvater“ auf. Dadurch änderte sich seine Sicht des Ödipuskomplexes. In der urtümlichen Vaterherde beherrschte der Urvater die Söhne. Daher litten Söhne unter einem Triebstau, denn ihr Sexualtrieb wurde vom Urvater behindert. Eines Tages verbanden die Söhe sich, um den Urvater zu erschlagen und zu verzehren. Dann identifizierten sie sich mit dem Urvater und erhielten so seine Stärke. Sie konnten ihre Sexualtriebe aber immer noch nicht befriedigen, da sie das „Schuldbewußtsein des Sohnes“ fühlten. Aus diesem Grund entstand das Verbot des Mordes und des Inzestes. Nach Jacques Lacan veränderte diese Vorstellung den Begriff des Ödipuskomplexes, indem sein Akzent sich von der bloßen Begierde nach Inzest auf das Schuldbewusstsein des Sohnes verschob. Für Rosine J. Perelberg war das Verbot des Inzestes die Ursache für die Entstehung des „Über-Ichs“.

In *Das Unbehagen in der Kultur* (1930) behauptet Freud, dass das Über-Ich im Verlauf der Entwicklung der Kultur stärker wurde, weshalb sich ein unheimliches Schuldgefühl herausbildete. Dieses Schuldgefühl beruht Freuds Meinung nach auf dem Konflikt zwischen dem Ich und dem Über-Ich. Letztlich gründet der Konflikt also auf dem Ödipuskomplex.

Schließlich erweiterte Freud seine Theorie in *Der Mann Moses und die monotheistische Religion* (1939) um den Gedanken, dass die Juden Moses töteten, weil er für sie eine Vaterfigur war. Dieser Mord verursachte natürlich auch ein Schuldbewusstsein, das später bei dem christlichen Theologen Paulus zur Grundlage seiner Lehre von der Erbsünde wurde. Das Christentum entstand demnach aus dem Judentum wegen des Wunsches nach Tilgung der Schuld: Christus sühnt die Erbsünde der Menschen.

Der Ödipuskomplex ist fraglos der zentrale Begriff in der Theorie Freuds. Seine Definition war aber bei Freud nicht statisch, sondern veränderte sich seit *Totem und Tabu* allmählich. Bestand sein Kern anfänglich nur in einer Begierde nach Inzest, so wurde er in der Folge zur Ursache des Schuldbewusstseins des Sohnes. Die Theorie des Über-Ichs entstammt diesem Wandel des Akzentes. Freud benutzte den Ansatz eines aus dem Konflikt zwischen Ich und Über-Ich resultierenden Schuldbewusstseins, um die Entwicklung der Zivilisation und der Religion zu erklären. Die wichtige Rolle, die der Psychoanalyse heute in der Gesellschaftslehre zukommt, beruht also auf dem Wandel des Begriffs des Ödipuskomplexes in Freuds Theorie.